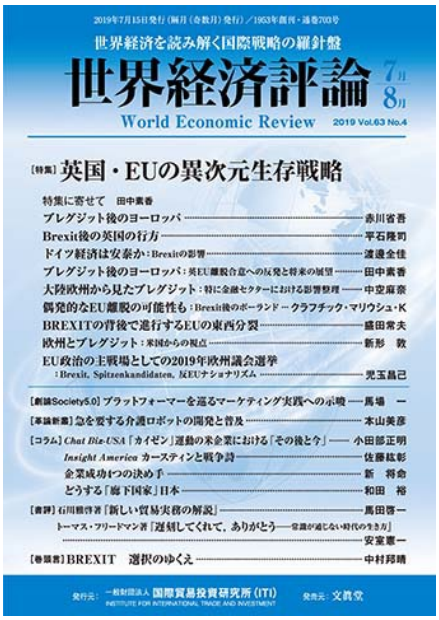
Back Number

本論文は

世界経済評論 2019 年 7/8 月号

(2019 年 7 月発行)

掲載の記事です


2019年7月15日発行（隔月（奇数月）発行）／1963年創刊・通巻703号

世界経済を読み解く国際戦略の羅針盤

世界経済評論 7月 8月

World Economic Review 2019 Vol.63 No.4

【特集】英国・EUの異次元生存戦略

特集に寄せて　田中素香

ブレグジット後のヨーロッパ ―― 赤川省吾

Brexit後の英国の行方 ―― 平石隆司

ドイツ経済は安泰か：Brexitの影響 ―― 渡邊全佳

ブレグジット後のヨーロッパ：英EU離脱合意への反発と将来の展望 ―― 田中素香

大陸欧州から見たブレグジット：特に金融セクターにおける影響整理 ―― 中空麻奈

偶発的なEU離脱の可能性も：Brexit後のボーランド ―― クラフチック・マリウシュ・K

BREXITの背後で進行するEUの東西分裂 ―― 盛田常夫

欧州とブレグジット：米国からの視点 ―― 新形　敦

EU政治の主戦場としての2019年欧州議会選挙
：Brexit, Spitzenkandidaten, 反EUナショナリズム ―― 児玉昌己

【創論Society5.0】プラットフォーマーを巡るマーケティング実践への示唆 ―― 馬場　一

【本論新潮】急を要する介護ロボットの開発と普及 ―― 本山美彦

【コラム】*Chat Biz-USA*「カイゼン」運動の米企業における「その後と今」 ―― 小田部正明

Insight America カーティンと戦争詩 ―― 佐藤紘彰

企業成功4つの決め手 ―― 新　将命

どうする「廃下国家」日本 ―― 和田　裕

【書評】石川雅啓著『新しい貿易実務の解説』 ―― 馬田啓一

トーマス・フリードマン著『遅刻してくれて，ありがとう――常識が通じない時代の生き方』 ―― 安室憲一

【巻頭言】BREXIT　選択のゆくえ ―― 中村邦晴

発行元：一般財団法人 国際貿易投資研究所（ITI） INSTITUTE FOR INTERNATIONAL TRADE AND INVESTMENT　発売元：文眞堂

世界経済評論 **定期購読のご案内**

年間購読料
1,320円×6冊＝7,920円 ▶ **6,600円** 税込

17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読期間中 デジタル版バックナンバー **読み放題!!**

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]

0120-223-223

お支払い方法　Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp 雑誌のオンライン書店

カースティンと戦争詩

佐藤 紘彰

この春ニューヨーク近代美術館（MoMA）と，別に David Zwirner の 19 丁目の画廊が展示している Lincoln Kirstein という人を知ったのは，戦争詩のためだった。

これももう 15 年以上も前になろう。ある夕べ，友人の詩人 Harvey Shapiro さんと会食した時，ぼくが訳して出たばかりの建畠哲さんの詩集「Runners in the Margins」をあげたら，お返しに編集して出たばかりの戦争選集「Poets of World War II」を送ってくださった。そこに選ばれた詩人の中にリンカン・カースティンがいたのである。

カースティンは詩人として有名ではない。ぼくが同志社英文科で習った英米詩人にもいなかったし，ニューヨークに来てから読み知った詩人にもいなかった。それも当然だった。詩集として知られたのは「Rhymes of a PFC」のみで，しかも自費出版だったらしい。しかし，それを 20 世紀英米詩の巨人 W.H. Auden が 1964 年の書評で「第二次大戦の絵図として，最も説得力があり，感動的，かつ見事な詩集」と褒めた。それもシャピロさんがカースティンを入れた理由だろう。

Monuments Men

カースティンが有名だったのはニューヨークの impresario としての業績だった。オーデンが書く通り，カースティンは「雑誌『Hound & Horn』の推進者，バレエ団体会長であり，ジョージ・バランチーンにその天才を発揮できる場を設けることにより古典バレエの推進に尽くした」人だった。

これに多少加えると，カースティンは，1848 年ドイツからアメリカに移民したユダヤ人の子孫で，1907 年裕福なボストンの家庭に生まれた。ハーバード大学に進んで，同大の文芸誌「The Harvard Advocate」にいくつかの優れた記事を書いたにも関わらず，自分を編集部に受け入れてくれない。そこで業を煮やして，別に創刊したのが「Hound & Horn」だった。

編集部に受け入れなかったのは，ハーバードは当時（その後 1960 年代まで）白人絶対優先の時代で，ユダヤ人を差別していたためだ。そこで，カースティンはニューヨークに引っ越した時にこの雑誌も持ってきて，芸術分野では重要な雑誌に押し上げ，他方，ソ連をその初期離れてヨーロッパにいた振付師ジョージ・バランチーンを 1933 年アメリカに招き，2 年後二人で School of American Ballet を樹立した。

第二次大戦が始まって，ルーズベルト大統領は，1943 年，ナチの下の略奪と破壊から美術品や銅像など（Arts, Monuments, and Archives）を保護する委員会を創立，これに英国やフランスの軍隊が協力した。カースティンは翌年その委員の一人としてロンドンに渡り，そこからパリに移動，ヨーロッパ美術品の救済と維持に努めた。これら委員会は 350 人の男女の専門家から成り，Monuments Men と呼ばれた。

1945 年 1 月，有名なジョージ・パットン将軍の率いる第三軍に private first class（一等兵）として加わった。後にこれら軍隊生活を描く詩集を出した時に PFC を使ったのはそのためだ。

戦後，1946 年 Ballet Society を作り，1948 年，それを New York City Ballet に名を変えた。ご存知の通り，これは今でも活動している。

カースティンは，当初から多岐の芸術分野で才能を発揮，1929 年，その創設の案が出された MoMA の生育過程では執筆，アイディア，資金集めその他で大きな寄与をした。この春 MoMA が設けた展示会 Lincoln Kirstein's Modern は，その貢献を主にその活動を絵画と動画で示す。

同性愛

さて，今は亡き友人のシャピロさんがくれた『第二次大戦の詩人たち』を読んで，選んだ詩人のうちカースティンに特に引かれたのは，この詩人を代表する四編の一つのためだった。それはまことに直截的な Snatch を題する詩で，兵隊が淫売宿で売春婦を買う状況を，これまたあから様な言葉を使って描いていた。これは 1944 年 6 月ノルマンディー上陸の後フランスに進軍したアメリカ軍の一情景だが，なぜ，Patton と題するパットン将軍賛美の詩や，Rank と題する軍隊の階級の詩ではなく，この詩に惹かれたか。

それは，戦争詩では，俯瞰的に戦争を描き，また個人の死を描いていても，兵士とセックスをこれほどあっけらかんに描いたものは読んだことがなかったからだ。それも，オーデンの言う通り，戦争中のセックスは「通常薄汚い」ものなのだろうが，それをそのまま描いていた。生暖かいビールを飲みながら自分の番を待ち，やってくると「ジープに潤滑油を塗るようにうまく」5 分間でやって，次の兵隊に譲る。

それに，当時，日本の慰安婦の問題が引き続き問題になっていた。

そこでぼくは『一等兵の詩』の増訂版（1966 年）を買い，読んだ。すると，これは子供時代の第一次大戦の思い出を除き，全て一兵卒の立場から見た戦争である。前書きで，これは別に自伝的なものではなく，いろんな人の体験を交えたものと断っているが，詩の中には，同性愛に関わるものもでてくる。Gloria，Syko，Fixer などなど。

そう同性愛といえば，カースティンは大学の頃から多くの男性と交わったが，また女性とも関係を持った。1941 年，画家の Fidelma Cadmus と結婚した後は，何人ものボーイフレンドを同じ家に住まわせたという。その家は，ぼくの住むところから程遠くないところにある。

死角よりグラマンの顔

それにしても，日本の戦争詩なぜこう貧しいのか。この 2 月，日本人として，日本で亡くなった Donald Keene はアジア・太平洋戦争中に書かれた戦争詩を dross「滓」と呼んだ。日本の戦争詩が概して詩として読むに耐えない理由はいくつもあろうが，何よりも 1920 年代の後半以後，軍国主義と国粋主義が日本を圧倒し，アメリカやイギリスを好むものは全てリベラリズムの標榜者であり，敵国の肩を持つ者と見なされる時代になったためだろう。

昨秋，俳句論集「On Haiku」を出した者として俳句を見ると，伝統俳句を外れるものはこれを「危険思想」とみなし，ついに 1940 年の京都俳句事件・新興俳句弾圧事件となった。そして，戦争に関する限り，これを賛美するか，御稜威の顕現という風にしなければ発表できなくなった。

たとえば，1942 年 3 月のシンガポール陥落を寿ぐ渡辺水巴の「神速の戦捷に梅花遅れたり」は結構だが，渡辺白泉の「死角よりグラマンの顔迫り来る」「友の血よ噴け八方へとびかかれ」などは到底，日の目を見ることがなかった。事実，これら白泉の句は，1969 年脳溢血で倒れて死んだ後，自筆原稿の中に見出されたものだった。

もっとも，カースティンの戦争詩も戦争中に公表されなかったようだ。これらの詩は除隊してから書き続けたものとの可能性が高い。

思うに，アメリカでは戦争中にはどんな戦争詩が公表を許され，また許されなかったのだろうか。たとえば，真珠湾攻撃を挑発したアメリカを嘲笑する Robinson Jeffers の Pearl Harbor はどうか。執筆とともに雑誌に公表できたのだろうか。できたとは思えない。

さとう　ひろあき　翻訳家，コラムニスト在 NY